

地域日本語教育の プログラムづくりを考える

野山 ありがとうございます。それでは、お2人にはこのまま並んでいただいて、後半のディスカッションに入っていきたいと思います。

北川さんに改めてうかがいたいのですが、先ほどの高木さんと石井さんのまとめの中で、まちづくりに関連していろいろな話が展開されました。行政とのつながり、あるいは行政との関係性をどうやって十数年の間構築してきたのか。その工夫のいくつかを紹介してほしいという質問が寄せられています。

◆ 行政、マスコミとどう付き合うか

北川 確かにボランティアのときは、私は自分で名刺を作って、いろいろな窓口を回らなければならない相談事がたくさんありました。生きていく上には、例えば子どもが生まれると、母子手帳をもらいに行く。言葉が分からなければ何もできないので、最初のうちはついて歩きました。大変でした。でもそのときにフト見えたことがありました。窓口って結構優しいのです。インパクトを強くして交渉すると、私のような人間がいると分かると、どこの窓口も、「ああ、あなたはあそこから来たのね」とすごく親切なのです。

県のコーディネーターという制度があります。これを発案したのは私です。なぜかというと、私のように手助けしているボランティアは、地域の中にたくさんいます。やはり最初は役所に電話で相談すると頭ごなしに、「何だか分からない人には教えられません」と言って切られてしまう。ですから、県の事業で日本語の指導者だけを集めた会議を開いて、証明書みたいな、印籠というかお墨付きを持たせてくれと要請しました。私は、そのとき一番印籠が欲しかった。それがあることによって、行政側の窓口も、割とすんなり受け取ってくれました。

それから行政に日誌を書く。お金をもらわないから書かせてくれと。なぜかという、場所を確保してもらっていたので、やはり場所を確保してもらった以上は、それなりの成果とか、何をしたとか必要でしょうと言ったら、担当者は「そ



うですね、あれば便利ですね」と。市町村はみんなそうですが、役所の窓口はだいたい4年に1回代わります。担当者とすごくうまく行って、よかったといっても、その人が代わったらまたゼロよりもっとひどいというのが多い。それが行政のやり方ですから、続けてくためには日誌みたいなものを残していく。でも、役所の人に「日誌を信じていいのか」と言われて、私は非常に気分が悪かったのですが、そこで思ったのが、新聞記事。新聞記者に書いてもらうのは、嘘とは受け取られないので。私はあまり名前を出したくないので、最初はほとんどしなかったのですが、途中から変わりました。何でも新聞に載せてもらおうと思いました。ただ、書くなら3回以上、教室を見てくださいと。うわべだけ見て書かれると、「とても楽しい教室」で終わりです。その記事を読んだ人には、「遊んでいる教室だ」と判断されます。かといって、「勉強しています」と書かれると、あそこは勉強ばかりして、何だか学校みたいだとなる、そうするとお嫁さんは来ないのです。ですから、「教室の中を見て、教室の雰囲気を感じて書くということだけはしてください」とお願いしました。

◆ 子どもの言語教育を考える

野山 質問の中に、子どもの話が結構あります。北川さんあての質問も多いのですが、先に石井さんにうかがいます。小学校で日本語をどうこうという話の前に、未就学、あるいは不就学の子どもの問題などがありますが、そういった観点から、地域、町、それから母親の立場などから今見えていることをお話ししていただければありがたいです。

石井 子どもの学習の問題が出てきたときによく言われるのは、日本生まれの子とか生後すぐに日本に来たような子に関しては、小さいときから日本にいて、小学校の1年生から日本の学校に行っているのだから、問題は言葉ではないはずだということになってしまいがちです。実は、小学校で組織的な教育を受けることの下地は、もうすでにその前の幼児期につくられているということが、割と意識されていない。

能代のケースもいろいろだと思いますが、最近よく報道される外国人集住地域などの場合は特に、私の知っている大学院生がした調査などでは、両親が共働きで、かつ非常に労働条件が過酷で、親子が顔を合わせる時間が1日30分以下という家庭が結構あり、実は家庭の中でも十分な対話が行われていないという状況が見えます。それから家庭の中で親子が日常生活で行っている対話というのは、多くが今、目の前に見える具体物に即したやりとりです。「そのリンゴ取って」と言うときには、言葉が分からなくても、ここにリンゴがあるわけだから、とにかくリンゴのことを言っているのだということは分かる。しかし、学習の場面で使われる言葉は、今、ここに見えることについて出ないことが多い。例えば歴史の勉強をするときに、何年前にはこういうことがあって、と言っても、目の前には何も浮かばないわけです。

そのように言葉でここにはない世界の物事についての話を構築していくということ、これは日常の家庭生活ではなかなか起こりにくい部分ですが、例えばその準備として、家庭でお話をしてあげるとか、本を読んであげるとか、そういうことをたっぷりする中で言葉で目の前にはない世界をつくっていくことをいっぱい経験していくことが、学校での学びにつながる助走期間としてあるわけです。日本生まれということで済まらず、家庭環境の中でそういう経験を十分受けてこられたかということを考える必要があります。親の方に本を読んであげたいという気持ちがあっても、親が十分読める言語でそういう本が手に入るか。例えば先ほどの話のように何年いてもなかなか日本語の読み書きができないという外国人の現実があるとすると、日本



語の本は山ほどあって、図書館に行けばただで借りられるけれども、言葉の問題あるいは時間的な問題でそれを活用することもできないかもしれない。

そういうことを含めて考えると、子どもは育つ環境を選べないということをしっかり受け止めなければならないと思います。子どもは親を選んで生まれてきたわけではないとすると、例えば育っていく環境が社会の中でどうやって保障されていくかということは、親の責任だと片づけるのではなく、当然子どもを育てていく社会の責任として考えていくべきことだろうと思うわけです。

野山 そのことに関して、北川さんは、今後能代市でも子どもの問題についてはいろいろ動いていきたいということをお話していましたが、今、具体的に考えていることがあればおうかがいしたいです。

北川 木曜日の教室は、だいたい生後3カ月から連れてきます。現実にも子どもと一緒に来る教室をずっとやってきて感じていることは、子どもは0歳児から、要するに3～4カ月から完全に言葉を聞いているのです。3～4歳になると、一般的に親から離して幼稚園へ入れた方が、日本語が上手になるということではほとんどのお母さんから切り離すという現実があります。しかし、私が福祉の方に話をして今やろうとしているのは、お母さんの母語が日本語でない人の子どもに対する読み聞かせとかそういうものをもっとやってほしいということです。なぜならば、小学校2～3年になって一番悩んでいるのが、擬音語、擬態語です。絵本に出てくるのは、ポロポロ、パラパラ、ポッチンなどなのです。でもお母さんは全然意味が分からない。私は、絵本を何冊か親に選ばせて、その絵本の読み聞かせを高校の放送部の生徒に頼み、録音テープにとって、それを渡して「家で聴きながら絵本を読めるようになりなさい」と言っています。

お母さんたちに、そういうふうには絵本が読めないと、自分の子どもはいろいろなことが足りなくなるということをお知らせするのも私たちの仕事と思っています。それと同時に、泣いたらどうやってあやすかをお母さんに見せる。話しても分からないので、いる前で赤ちゃんのあやし方を見せる。それから、子どもたちのための学習言語のための日本語教室、「幼児教室」と名前はつけるつもりですが、それをつくろうと思っています。今、火曜日と木曜日に教室をつくっているのですが、土曜日は学校がお休みですから、月に2回ぐらい、日本語が分からないから学習言語ができないという子どもたちだけを集めて教室をやろうと。たぶん30～40人は集められると思います。

野山 先ほど高木さんが、生活言語と学習言語と分けがちだけれども、生活言語という言葉の根っこから考え直した方がいいのではないかと思ったという発言が

ありました。今の北川さんの学習言語の教室を開くということとも関連がある話なので、ぜひ生活言語を根っこから考え直した方がいいという発言の意図について、うかがっておきたいのですが。

高木 普通、生活言語と言うときは、いわゆるコミュニカティブな言葉で、文脈の支えがあるので理解がしやすいから、例えば子どもでも大人でも、そっちの言葉で、あれとかそれとか目の前にあるから分かるでしょうという意味で使いますね。ここにいらっしゃる方にはあえて説明することではないと思いますが。そうではなくて、生活のために必要な言葉って、ものすごく抽象的な言葉もあるのだと思います。だから、この人たちがここで生きていくために何の言葉がまず必要か、ということから作戦を立てていくということです。生活言語という言葉ではなく、例えば生活の中の言葉とか、生活に根差した言葉とか、そういう意味の言葉というものにすごく注目して、それから言葉を使う一連の活動だとかに注目していくということを実質的にやられているのではないかと。

生活言語や学習言語というのは、言ってみれば言葉の専門家たちが構想している概念であって、言葉ベースです。だけど実際に言葉を習う人たちとか、学んでいかなければいけない人たちというのは、生活があつての言葉ですから、生活をベースにして言葉を考えるという意味で、もう一度、つい我々は安直に生活言語

と言ってしまいますが、そうではない言葉。例えば敬語などにしても、敬語をともに使えないと生きにくい社会で生きていたとしたら、それはその人たちにとっての生活言語ですから、それをまず何とか教えていくにはどうしたらいいか、身につけてもらうにはどうしたらいいか構想するという発想が必要ではないか。

野山 関連した質問で、高木さんにもうかがっておきたいのですが、大人の学習、心理学的に言うとモチベーションを上げようとして、先ほど池田さんが、能力試験3級に受かった後、2級、1級の目標ができて頑張ったということがありました。子どもの日本語学習のモチベーションを上げようとするときの具体的な方法があるでしょうか。あったら教えてくださいという質問です。

◆ 言語学習の動機づけとは

高木 要は必然的であるということはすごく大事だと思います。それは、我々が例えば英会話学校へ行って、好きでもない映画について語られるのはつらいじゃないですか。必然的だということはすごく重要で、それは発達心理学的に見ても、子どもの、言語だけではなくて、いろいろな知的なパフォーマンスが高くなる状態というのは、課題がその子にとって必然的であるというのは非常に重要だといわれています。例えば、5歳児ぐらいに単語を暗記させましょうみたいなことをやるわけです。そうすると、単に覚えろと言うと、その子たちはまだ学校に慣れていないから、年長さんぐらいになると学校の準備をするのでちょっと変わってくるのですが、4歳児ぐらいに単語を覚えなさいと言うと、意味が分からないから全然覚えませんが、お買い物をして来てほしいから、これとこれを買って来てと言うと、割と覚えたりします。これはすごくシンプルな例ですが、やはり必然的であるということはすごく重要であって、それも言ってみれば、子どもの生活の中に必然的に根差した言葉をどうやって探すのかということにかかわってくる。

僕たちも、文科省でJSL（Japanese as a Second Language = 第二言語としての日本語）という、それこそ学習言語のためのカリキュラムを作りましたが、その大原則は、子どもの興味、関心から始める。とりわけ学習というのは興味があって学ぶというのが大事なのであって、興味があって学ぶ活動に言葉が出てくるわけですから、まずそこから出発しようと、そんな感じです。

野山 そろそろまとめに入りたいと思います。最後に一言ずつ、参加者の人たちから、今後共生のまちづくりに向けてどんなことができるかということ、感想も含めて1～2分で話をしていただきたいと思います。

石井 日本語教室というのがたくさんありますけれど、日本語を教え込む場ではなくて、人を育てる場だと考えます。それは人とのかかわりですから、そこで、教える側に立つ人間も含めて、人が育てられる場なのだと思います。

高木 北川さんのお話をうかがって、ちょっと難しいなという面も見えてきました。手をつなげばいいということですが、手をつなぐことを可能にする人というのがなかなかいないのだと思います。組織や制度が完備されれば自動的に動くという話ではなくて、多分に人格的な側面がある。人柄とか才能とか、そういうものがある感じがします。でも、地域にはいるのだらうと思います。だから、制度的に整備していくということに加えて、そういうことに向いている人をうまく引き起こしていくというのが、結構大事なのかなと思いました。

藤田 私は、今日のタイトルには共生と書かなかったのですが、自分は学部のときはアメリカの環境保護運動が専門で、環境関係の卒論を書きました。そのとき、共生というのは生態学、バイオエコロジーの方で知った言葉で、自然環境とか地球環境とどう付き合うかということが共生でした。その後も、自分は化学会社に勤務していたので、そちらの視点からしか共生という単語に触れることはなかったのですが、こういう多文化社会という中で、共生というのがものすごく大きく取り上げられて、本当にそのことの意味をどうみんながとらえているのだらうとか、それをどうとらえて生きていくのかというのを、最近よく考えます。ともに生きるとか、ともに作り上げる「共創」社会といいますが、言葉はどうあれ、人とどう向き合って、どう対話して、どう付き合っていくのが重要な部分だと思います。自分は識字教育で知られるブラジルの教育学者 Paulo Freire (パウロ・フレイレ) のクリティカルリテラシー (critical literacy = 批判的識字教育) をアメリカの移民向けの ESL (English as a Second Language = 第二言語としての英語) に応用した取り組みについて修士論文で取り上げたのですが、対話を通じて相手のことが分かったり、自分の役割が分かったりしていく過程から、お互いの付き合い方を知る部分と、この社会の中に正統的なメンバー、成員として、そのコミュニティでどう自分の役割を果たしていくのかというのを誰もが意識したときに、共生といわなくてもその町は、高齢者にとっても、若い人にとっても、外国人にとっても、それぞれの視点から変わるのではないかと思っています。

私の役割を考えると、「のしろ日本語学習会」のことを外に伝えていく部分や、大学がない町の中で、多領域の研究者にこの教室のことを紹介し、見てもらって、教室の参加者や家族も含め対話の機会を設ける、それを支え、担うという面があります。

◆ 人の育成と学びの機会をつくる

高木さんの勤務している、東京学芸大学の国際教育センターの紀要『国際教育評論』の1号に、「乳幼児とともに学ぶ日本語教室の可能性」を投稿しました。能代市の教室では、いつも子どもたちも一緒に参加している中で親が日本語を学んでいる。子どもたちも親のまねをします。最初のおもちゃが鉛筆なのです。くわえもするけれども、書くまねもします。本人は書いているつもりなんです。黒板にも、親が書けば書きたい。そういう姿をこれまで見てきました。

文化庁の親子参加型日本語教室事業の関係で、能代市の保育関係者が見学に来た際、4カ月から来ている赤ちゃんがいました。8カ月目ぐらいだったと思いますが、お母さんの脇でおとなしく寝ていたのですが、起きて泣きました。そうしたら、保育士の人が、すぐ子どもを抱いて教室の外へ出て行ってしまいました。たぶん、泣くから、うるさくて邪魔だと判断したのだと思います。彼女の、ふだん保育士として保育所で働いている立場からすれば当然なのかもしれません。ところが、その子どもがいなくなった途端に、教室のみんなの様子がおかしくなりました。何と言っていいかわかりませんが、落ち着かないのが分かるのです。泣いていても、子どもは誰か見る人が見てくれていると思っているけれども、子どもがいなくなると、その親だけではなく、みんなが落ち着きがなくなり、そして子どもは、外に出たら発狂するかのように泣いているのが響き渡って、教室内にも聞こえてきました。一般的には乳幼児はいない方が学習は促進されるのかもしれないけれども、そうではないやり方というものもあるのではないかと感じました。そのことにも触れているので、読んでもらえたらと思います。

北川さんは、ここ数年ぐらい、子どもをどう育てていくか、地域で子どもたちをどう自立させていくかについて考えています。それは低学年の子どもだけではなく、中国のお母さんたち、実は再婚で、呼び寄せや帯同して連れてきた子どもが中学生のケースもありますし、高校生もいます。それからフィリピンの子どもたちでも、母親の再婚で呼び寄せられたり、能代市に新たに來る子どもたちが増えてきているので、

先ほど示したぐらいの学習者の数になります。こういう子どもたちは、目前に社会に出るといえることが見えてきているわけです。その子たちに、どう地域で暮らしていったらいいのか。言葉を身につけて、今後もずっと日本にいたいことを希望して帰化している人たちもいるので、そこについて、ともかく人の育成というところに今、取り組んでいます。

この会の中でも、親の学びは子の学びになり、子の学びは親の学びになっています。それは家族だけではなく、地域の中でいろいろな人たちが学習している様子を見れば、その地域の中の人たちは文化に触れるとか、本に触れるとか、いろいろなところで学んでいくと思います。そういう学びのきっかけをたくさん提供していくのが、自分たちの仕事だと思っています。それによって、より自分と対話をして、自分の役割を自覚していくのではないかと思います。非常に長くなりましたが、最初の質問の私の考える共生というところに答えつつもです。

野山 実はその質問の内容は、今紹介いただいた論文とか論考を読んでいただくと、かなり詳しく書いてあります。ウェブで読めるものがありますので、目を通していただければと思います。池田さん、ご感想を。

池田 久しぶりにこのような機会をいただきありがとうございます。これから、まず家族の絆、人と人の付き合いの絆、もっと深くなるために、自分は日本語をもっと勉強しないとならないなと思いました。再びこの気持ちが熱くなってきました。皆さんありがとうございます。

北川 私は、こういう池田さんみたいな人を育てたくて始めたのです。私は18年続けてきました。なので、教えた子が結婚して、子どもを産んでいるのです。1人の人間をずっとこれから、たぶん私が死ぬまで見ていかなければならない現実があって、小学校4年で来た子が中学生になって、高校生になって、20歳過ぎて、今、最初の子が結婚している。一番つらかったのが、中国の人が日本の高校を出ていながら、日本のお嫁さんをもらえない。「どうして？ 先生、僕どんなに頑張っても、お友達としてはいいんだけど、結婚というのダメなんだよね」と。結局、その人は中国の人と結婚し、そのお嫁さんに私が日本語を教えて、生まれた子どもも私がまたやっているという現実があります。育ててきた子どもがこんな形で生きていかなければならない。でも、そうしたらこの子どもがまた同じことを繰り返さないためには、私はもっと子どもにかかわる姿勢を私が持ちたいと思った。それは最終的には私の、先ほど手練手管と言われましたが、いろいろな手練手管を使って、私1人ではなくて、もっと学校を巻き込む、もっと保育所や幼稚園を巻き込む。そして、もっといろいろな人たちを巻き込むような子

どもの支援ができればいいなと思っています。それはなぜかというと、私が年を取って、私を見てくれるとしたら、この池田さんや池田さんの子どもたちなのです。

野山 ありがとうございます。皆さんの言ったことのキーワードを取って、最後にちょっとだけまとめて終わりにしたいと思います。たまたま藤田さんが、対話というフレイレの言葉を持ってきました。対話というときに象徴的なのは、北川さんの教室でのご主人や家族を巻き込んだ誓約書作りです。第三者も巻き込んで対話に持ち込んで、ちゃんと理解してもらって、教室に来たときにはすべてに意思疎通ができるような状態をつくっていく。子どもへの対応もそうです。対話を心掛けているのだらうと思います。

それから、池田さんを自分の教え子と思っている感覚というのはどういう意味合いかということ、今日の言葉で言うと、人が人として人らしく生きるための学校として教室が存在する。そこで教えた教師としては、そう思っていらっしゃる。池田さんもそう思い始めてくれて、先ほど人の絆、家族の絆をまた感じて勉強したいというふうに言ってくださったわけですが、この絆という言葉は、今日の言葉で言うと、石井さんが連鎖、玉突きという言葉で表現していました。まさに北川さん本人の希望の中では、連鎖、玉突きの後、人の循環、継承というのが始まらなければ続かない。子育ての問題、年少者の教育という問題も、その連鎖の問題です。

その循環をしていくときにとても重要なのは、高木さんの言葉を借りて言えば、他者を配慮する位置取りをいかにつくっていくのかということです。地域において他者というのは、地域の周り全体です。そこで自分の位置取りを確認した後、いかに配慮して生活をキチンと安定し、家族の絆を感じるかということを実感してきた人が池田さんです。その中で、どんなふう日本語を学べばいいのか。あるいは、中国語をどのタイミングで娘さんに伝えればいいのかということをしつかりやってきた方の代表格の人だと思います。そのことによって、これも高木さんが言ったことですが、いろいろな町の行事に参加しつつも、个性的になっていくという話をしました。つまり、池田さんはいろいろな行事に参加して、その成果として、その経過として、中国語の講師として个性的な力を発揮したわけです。これがまさに、まちづくりに参加し、貢献したということにつながったわけです。

今日のキーワードの中に埋め込まれたいろいろな思いや、いろいろな意味というのが、今のお話の感想の中でいろいろつながっていく部分があったので、それを思い切りまとめてみました。